

# 臓器移植ドナー 心の軌跡克明に

## 懇願され、嫌と言えず／妻死亡もやれることやった

大病院で約20年、看護師として移植医療に関わった立命館大生存学研究所センター客員研究員一宮茂子さん(69)＝京都市北区＝が、生体肝移植で臓器を提供するドナーの「その後」を聴き取る調査を続けている。一宮さんは「ドナーは移植後のケアがおろそかになりがち。心の軌跡をたどり、心理面



「看護師としての経験を通じて考えたことを本にして伝えなかつた」という一宮さん。ドナーから見た移植医療の実態を伝えるよう心を砕いた(京都市左京区)

を含むケアの必要性を感じて」と話し、ドナーは自発的なばかりではないなど、移植医療の課題を指摘する。このほど、17人の記録を著書「移植と家族」にまとめた。17人は、1990年代～2000年代に大病院で親族間の移植手術を経験。後日、一宮さんが対面などで聴き取った。

臓器提供を決めた経緯を調べると、夫に移植を勧めた「元氣な生活を取り戻してほしい」と思った40代の女性など自発的な決意が13例。強制的に見受けられたのが4例あった。

20代の前妻の子に移植した40代の後妻の女性は、担当医師から移植の説明を受けた席上、前妻の子とその妻、夫が一斉に自分を見る経験語る。とても冷たく感じたが「子や夫から『お願いします』と懇願され、『嫌だとは言えなかつた』と想起する。女性が担当医師による意思確認で「すべて大丈

## 立命大客員研究員の元看護師 17人聴き取り

夫です」と答えたことに、「カムフラージュされた同意の言葉」と一宮さんは指摘。ドナーの言葉と本心のずれに注意を促している。

「やることだけは全部やった」というドナーも。50代の男性は、妻から「肝臓をください」とメモを渡され、「俺のを使えばよい」と当然のように引き受けた。妻は術後約2カ月で亡くなった。それでも、男性は自身が移植したことを肯定的に意味つけた。移植した相手がなくなった中で、唯一の例だった。

各事例から、インフォームドコンセント(十分な説明と同意)の理解度や、移植機関とドナーの地元病院との連携などの課題もつづる。レシピエントがねぎらいや感謝をドナーに言葉で示す大切さも指摘する。

一宮さんは「医療は皆の幸福のためにある。ドナーが移植してよかったと思えるように医療者などが努めるのが大事」と語る。「移植と家族」は岩波書店刊。3132円。(広瀬一隆)